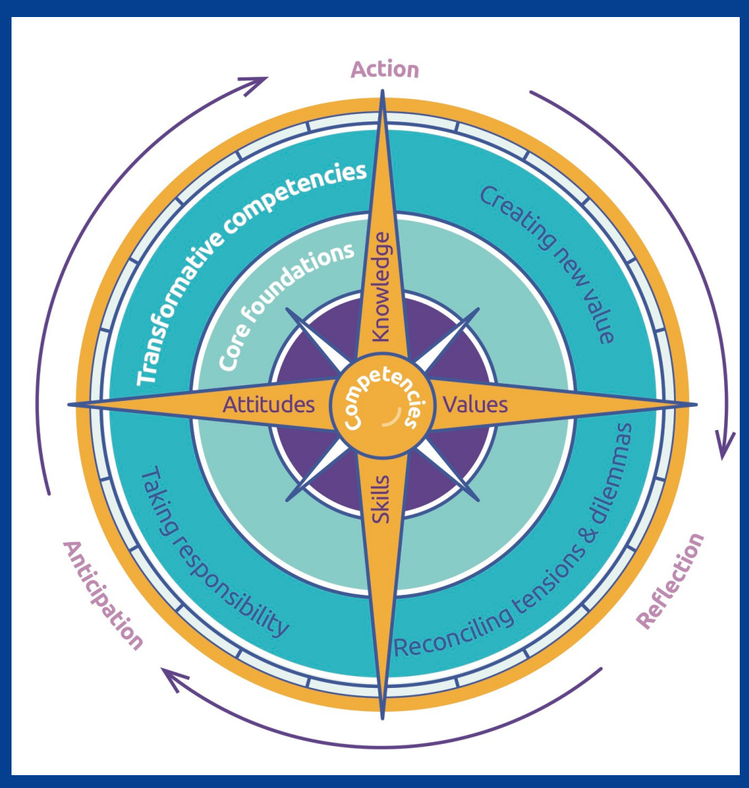
PASSPORT

TO THE 3RD GLOBAL FORUM ON THE FUTURE OF EDUCATION & SKILLS 2030



OECD
BETTER POLICIES FOR BETTER LIVES

Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD)
Future of Education & Skills 2030

はじめに

OECD主催のグローバル・フォーラム「Future of Education and Skills 2030（教育とスキルの未来2030）」 は、カリキュラムの見直し、デザイン、そして実践の分野で活動している教育コミュニティのための、マルチ・ステークスホルダーによる国際的なプラットフォームです。

エストニアがオンライン上の開催国となった2021年5月10日-12日の第3回グローバル・フォーラムには、政策立案者、カリキュラムの提供者（教員、教員養成者、行政官）、生徒学生、時代の先端をいく思想を生み出すリーダー、ソーシャル・パートナーが集まり、以下のことを実施しました：

- Education 2030による最新のカリキュラム報告書 ***カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する（Adapting Curriculum to Bridge Equity Gaps)*** の共同発表
- 最先端の政策について学び、公正性のギャップを埋めていくための支援についてのダイアローグ（対話）の実施。なお、対話では、ホスト国であるエストニアの事例に注目し、格差是正の手段としてカリキュラムのデジタル改革と個別化されたカリキュラムに焦点が当てられた
- カリキュラム改革を通じて格差をなくすために必要となる教師エージェンシー、コンピテンシー、ウェルビーイングの種類と、カリキュラム、現状把握、そして評価をデジタルツールを利用した教授及び学習にどう適応させていくのか、についてより深く、注意して検討された

この文書の目的は、第3回Global ForumにてE2030のメンバーが歩んだオンライン上の「旅」を皆さんと共有することであり、そこには、パネル・ディスカッションやブレークアウト・セッションそしてプレゼンテーションから得たキー・メッセージとハイライトが含まれています。この「パスポート：第3回GLobal Forum the Future of Education and Skills 2030へ～格差を解消し、公正性を実現する～」は、E2030のメンバーがフォーラムのクリエイティブ・サマリー・レコードとして作成したものです。あなたはもうこのパスポートを手にしたので、興味を持って頂けそうな様々なステークスホルダーの方々にこの成果をどうぞ広めてください。皆さんがE2030のコミュニティを支援してくださるきっかけになればと願っています！

パスポートの目的地：
・拠点となる港（母港）：第3回グローバル・フォーラム「Future of Education and Skills 2030（教育とスキルの未来2030）」の概要
・目的地1：カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する
・目的地2：公平な学習・職場環境のためのコンピテンシー
・次の目的地：E2030プロジェクトのテーマ別ワーキンググループについての簡単な説明

本パスポートは、所有者の置かれている状況に関わらず、また所有者が世界のどこにいたとしても、教育へのアクセスを保証します。中核をなしているのは公正性です。

OECD

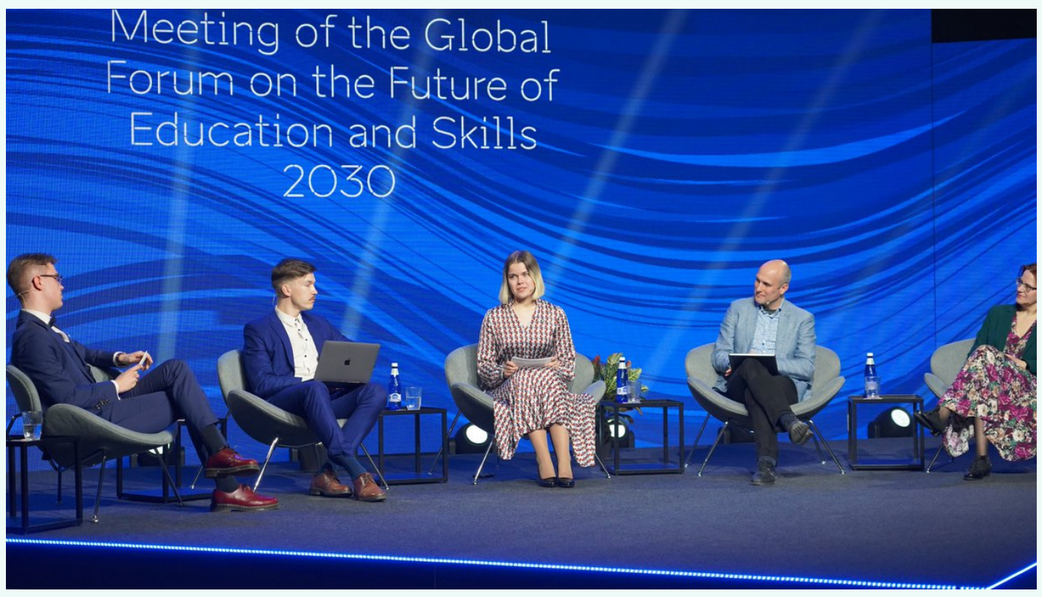
拠点となる港（母港）：エストニアのタリンにて2021年5月10-12日に開催された第3回グローバル・フォーラム「教育とスキルの未来2030」の概要

（公正性の）ギャップにご注意ください!

フォーラムは学生によって開催され、進行されました。そして、「ポスト・コロナの教育に向けた準備：デジタル化と個別化されたカリキュラムで公平性のギャップを埋める」に焦点が当てられました。詳細は、こちらの議題をご覧ください。

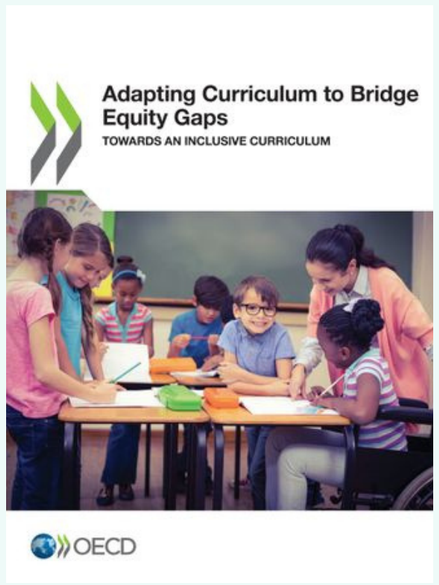
グローバル・フォーラムのハッシュタグ

#FutureReadyCurricula　#Ed2030GlobalForum

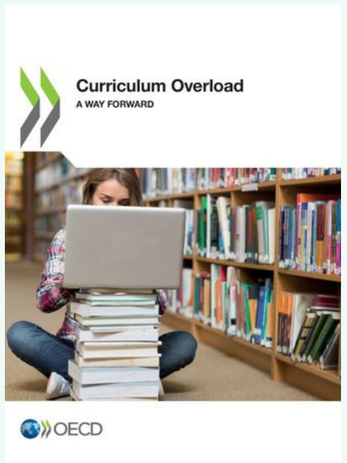


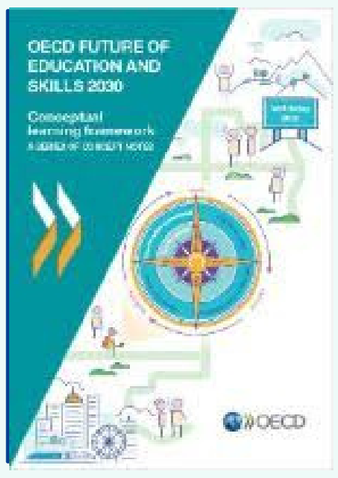
フォーラムはエストニアの学校へのバーチャル訪問から始まり、フォーラムの中心となる、カリキュラムのデジタル改革と公正性のギャップをなくすことに関するマルチステークスホルダーによる対話を引き出してくれました。なお対話では、教師エージェンシーと公平な学習・職場環境に必要なコンピテンシーに焦点が当てられていました。ミーティングの概要を記録した映像は、こちらからご利用頂けます。

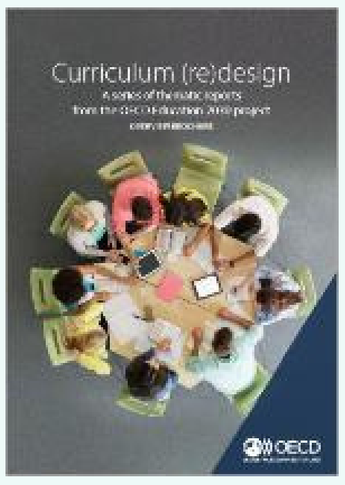
カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する：インクルーシブなカリキュラムに向けては2021年5月10日に刊行されており、カリキュラムに関する比較分析シリーズの最新版です。同報告書では、既存の文献を要約し、各国から報告された課題と戦略を提示し、各国におけるカリキュラム改革から学びえた教訓を報告しています。E2030では、政策立案者、研究者、学校関係者、NGO、その他のソーシャル・パートナー、そしても最も重要である子どもを含むマルチ・ステークスホルダーと共に新しい知識を共創することで、包括的なカリキュラム分析を実施しました。



E2030 カリキュラム分析シリーズにおけるその他の報告書と小冊子







目的地1：格差をなくし公正性を実現するためのカリキュラムデザイン

フォーラムの2日目に報告書「カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する」が発表されました。そして、学習経験・教育実践・研究成果・政策を含む様々なステークホルダーの観点を持つ代表例から構成されたパネルが設けられました。以下がパネル・ディスカッションのハイライトになります。パネル・セッションのビデオ録画（完全版）はこちらからご覧いただけます。

学習経験から見えてきたこと

マクシム・スワルジェス（Maxime Zwartjes），生徒

・学生は単なる学生としての役割ではなく、ひとりの人間として認識されていると感じる必要があります。
・教師は子どもを包摂することも排除することもできるので、教師の役割は極めて重要です。
・教師は一人ひとりの子どもと会話をする時間が与えられる必要があります。
・支援対象は、マジョリティのみに向けられるのではなく、すべての子どもに向けられなければなりません。

教育実践から見えてきたこと

マイケル・コップ（Michael Kopp），教師

・教師は、子どもの帰属意識やつながりを高め、お互いの共感を促すためのステップとして、子どもが個人として自分の現実を認識し、話し合い、理解するための機会を設けることができます。
・競争よりも協力と想像力を体系的に認め、奨励する公正な学習環境を構築するには我々全員の努力が必要です。

研究成果から見えてきたこと

アンドレアス・シュライヒャー（Andreas Schleicher），OECD教育・スキル局　局長

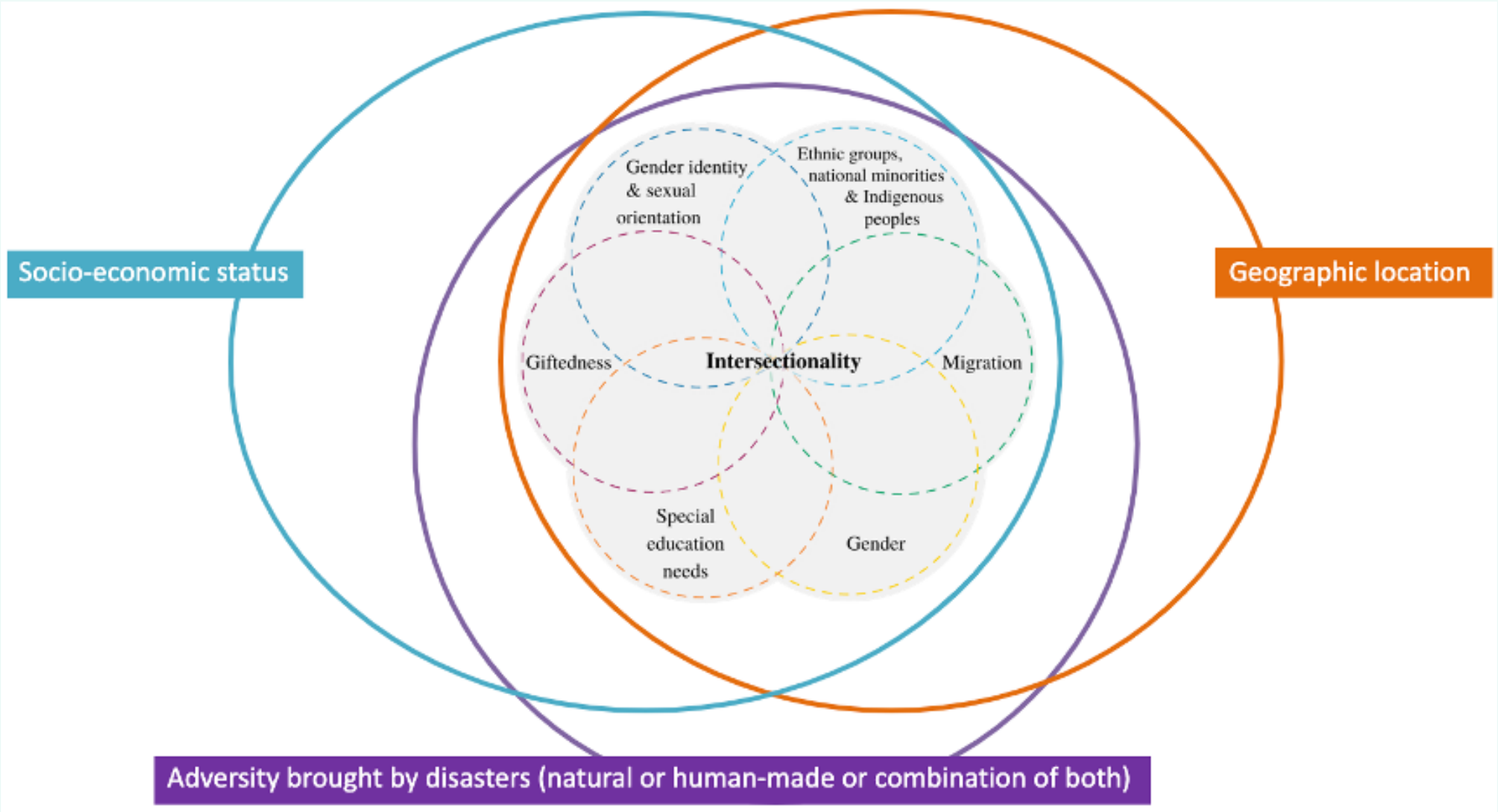
・新型コロナウイルスの感染拡大は、教育システムの内外に潜在していた不平等を拡大させました。
・子どもが公平にデジタル・ツールへアクセスできるようにすることは必要ですが、同時にオンライン上の不確かな情報を選別するためのコンピテンシーを身につけることも必要です（オンライン上の意見と事実を見分けること等）。
・どのような子どもにも適したカリキュラムというものはありません。 学びのユニバーサルデザインを取り入れることで学習者の障壁を取り除き、学習の内容・理由・方法を体系的に導入できます。

政策から見えてきたこと

リーナ・ケルセナ（Liina Kersna），エストニア教育研究省大臣

・学習に対する構造的な障壁を取り除くことは、社会と教育における政策の連携を図ることから始まります。
・共同エージェンシーは構造的な変化を促進する中心的な原動力です。 学校システムの関係者全員が、標準の開発と合意に対する責任を共有する必要があります。
・評価は、排除ではなく、包摂の装置でなければなりません。
・Education2030は国の教育戦略を充実させ、カリキュラムに影響を与えてきました。

フォーラム参加者はインターセクショナリティについて話し合い、関連づけて公正性の要因を社会・経済的に不安定な立場に関する質問をもとに議論しました。この後、報告書「カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する」でも取り上げられたインターセクショナリティに関するパネルセッションが行われました。

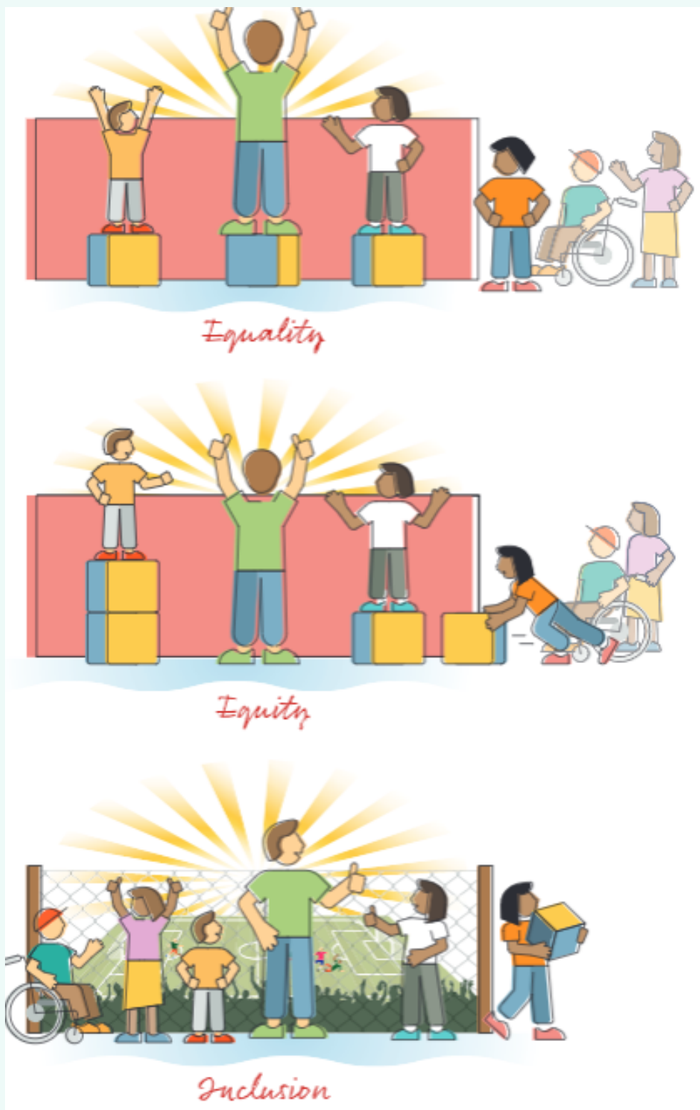


"Adjusting Curriculum to Bridge Equity Gaps: towards an inclusive curriculum", reference to the Strength through Diversity Framework

- 子どもの履歴に見られる社会的・個人的な差異は、学習の成果、教育の到達、より広範な成長の実績への不公平な制約に関連しているとされています。
- これらの交差する側面は、子どもの社会的状況と相まって、潜在的に弱い立場にある子どもを特定することができるため、カリキュラムを設計または再設計する際に考慮される必要があります。

パネルセッションでの発表に続き、参加者は社会・経済的に不安定な立場に置かれることとそれが学習に与える影響についてワークショップで話し合いました。その中で次の3つの共通するテーマが浮かび上がりました:
・子ども個人の状況や社会・経済的背景（家庭環境、限られた資源とリスク要因による影響、と交差する要因が及ぼす不利益）
・学校の学習環境（支援の度合いとカリキュラムの妥当性）
・他の子どもや教師との関係性（仲間外れに感じる、置いてけぼりにされていると感じる）

フォーラム参加者は、報告書に含まれる以下の画像を基に、カリキュラムデザインにおける平等性、公正性、包摂性（インクルージョン）へのアプローチについても議論しました。



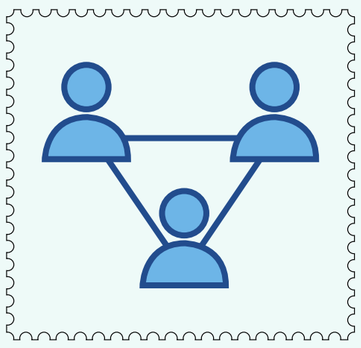
報告書では、カリキュラムをデザインするための3つのアプローチが次のように示されました:

・**平等性:** カリキュラムの中ですべての子どもたちを平等に扱うこと（上位の図）
・**公正性:** 参加するために必要な中核的または必須の知識とスキルを習得できる機会をすべての子どもに与えること（中位の図）
・**包摂性:** すべての子どもたちに、補助や支援なしで、それぞれの能力を発揮できる質の高いカリキュラムを提供すること（下位の図）

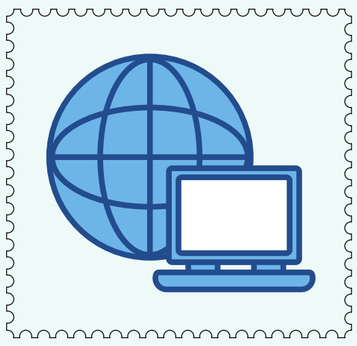
フォーラム参加者は、彼（女）ら自身の経験を織り交ぜながら、上記3つの選択肢の利点と限界について話合いました。

Source: OECD (2021) *Adapting Curriculum to Bridge Equity Gaps: Towards an Inclusive Curriculum*, inspired by and adapted from City for All Women Initiative, 2015, https://www.cawi-ivtf.org/sites/default/files/publications/advancing-equity-inclusion-web_0.pdf .

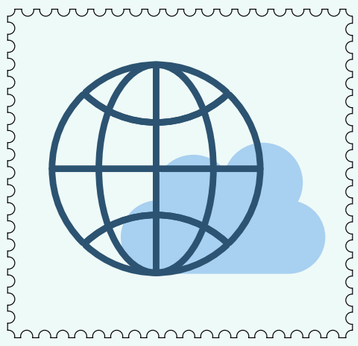
ワークショップでは、デジタル・カリキュラムがどれほど格差を是正し、公正性を実現できうるのかについて議論がなされました。そこではサポート・ツールとしてのデジタル教材を通じて、包摂的なカリキュラムを実現する可能性を持つテーマとして以下が浮上しました。



教師コンピテンシー：
教師は子どもを包摂することも排除することもできます。教師の支援は、大勢多数のみに向けられるのではなく、すべての子どもを対象としなければなりません。教師は一人ひとりの子どもと会話をする時間が与えられる必要があります。



デジタル・カリキュラムは、現在利用可能な様々なデジタルリソースを使用することで、子どもたちの学習評価を向上させることができます。そしてデジタル・カリキュラムは、子どもたちをランクづけするためではなく、個人の学習を促進するために最適化され、個別化されます。



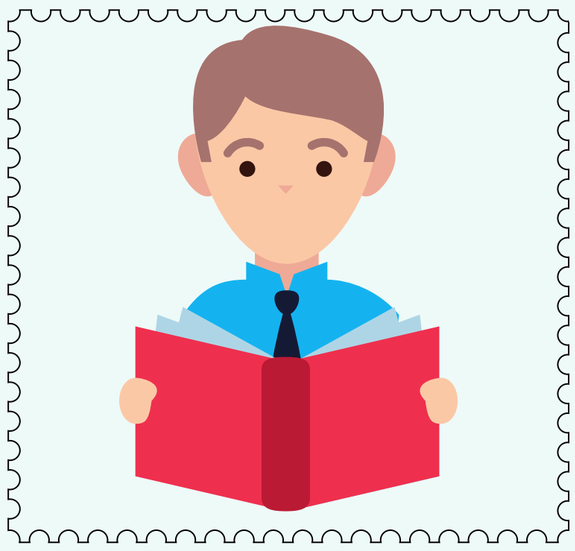
デジタル・ツールとデジタル・リソースは、その質が高い場合にのみ効果が得られます。従って、教育者がデジタル・ソリューションの開発に直接的に関与していることが重要です。

それぞれの子どものデジタル機器と没入型学習環境体験へのアクセスを拡大するには、**官民のパートナーシップ**を適切に活用する必要があります。

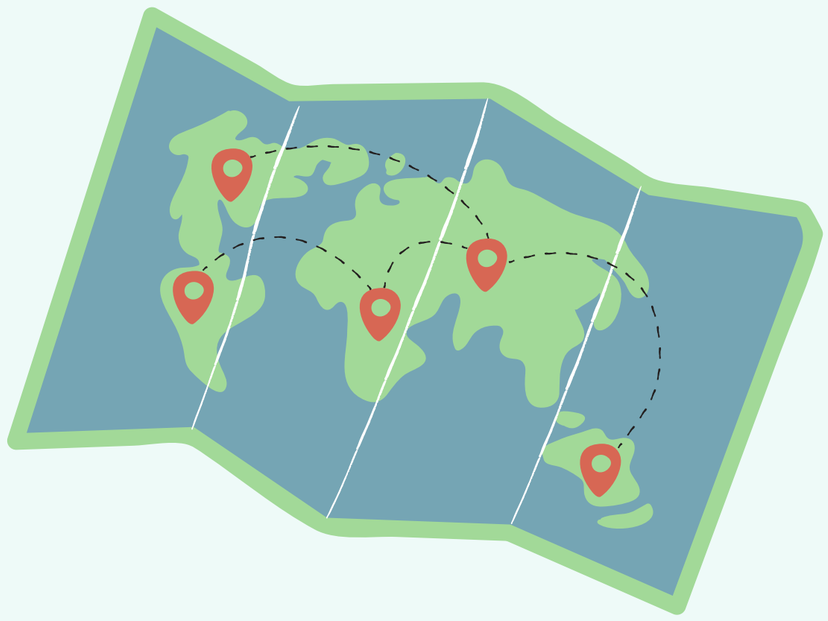
フォーラム参加者は、報告書「カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する」で紹介されている、公正性のギャップを埋めるための取り組みから得た5つの教訓について、それぞれの経験を振り返りながら話し合いました。

失敗から学んだこと

1. **子どもが持つ強みを伸ばしていく際に、ユニバーサルデザインをチェックリストとして利用する**ことは、子どもたちがカリキュラムに反映された「自分自身を見る」ための出発点となります。
2. **目に見える格差と目に見えない格差を埋めるために必要なリソースを過小評価してはならなりません。**そのようなリソースには、目立たない子どもを認識することや、グループワークを活用すること、それから目に見えない課題や子どもが経験している精神的な課題をよりよく認識するための適切な専門的学習機会を教師に提供することが含まれます。
3. 個別化されたカリキュラムや教科横断的なコンテンツ、そしてコンピテンシー・ベースのカリキュラムに対する評判が悪化しないようにするには、（政策立案者、子ども、高等教育機関を含む）**ステークスホルダーの積極的な参画を促し**、誤解を解消し、**公共の利益と子どもの参画とウェルビーイングを基本原則としておくこと**が重要です。
4. 学習や評価そのものよりも子どもの全人格を重視することで、なぜ評価するのか、どのように評価するのか、何を評価するのかが明確になり、**点数や順位を付けるための評価から、学習のための評価、学習自体の評価へと移っていきます。**
5. **官民パートナーシップは、そこに共有する目標と相互の利益がある場合、潜在的な機会を掘り起こします。**リスクもありますが、意図や利益の透明性があり、政府の支援がある場合にはリスクを最小限に抑えることができます。



2日目と3日目のフォーラム参加者は、マルチステークスホルダーで構成された小グループに分かれて、以下の問いに答えながら、格差を是正し公正性を実現する方法について話し合いました。



ダイアログAで話し合われた質問

「あなたの学校にいる、社会経済的に弱い立場に置かれた子どもは誰だと思いますか？ そして、何が彼（女）らを弱い立場に追いやっているのだと思いますか？ 」

「あなたが思い浮かべた子どもにとって、デジタルカリキュラムはどのように役立つと思いますか？ デジタルカリキュラムには、例えば（学校での使用言語を母国語としない子どもを対象とした）言語学習のためのデジタル辞書や、（書くこと、タイピングに身体的な困難を有している子どもを対象とした）キーボード入力のための音声認識等があり、それぞれの子どものニーズに応じた個別の学習を促進できます。」

「デジタルカリキュラムは、彼（女）らの評価をどのように改善することができると思いますか？ 例えば、読むことが困難な子どものためのテキスト読み上げソフトを搭載したコンピュータ、評価設問への回答内容から子どもの能力レベルに合わせて調整される適応型評価、その他には学習分析、ビッグデータ、AI、ブロックチェーン、モノのインターネット（IoT）などの利用が挙げられます。」

ダイアログDで話し合われた質問

「子どもたち、とりわけダイアログAからCまで私たちが検討してきた立場の弱い子どもたちのエージェンシーを促進する、あなたの学習環境について考えてみましょう」

「どのような学習環境が子どもの学習意欲を掻き立て、目的意識をもたらし、安心安全を確保してくれるでしょうか？ そして、そうした環境をデザインするために教師が必要なコンピテンシーとは何でしょうか？ もし環境が子どものエージェンシーを促進させていない場合、教師は環境を改善するために何をすべきでしょうか？ 」

「あなたが教師でない場合は教師の立場になってみてください。教師が教えることの意欲を高め、目的意識を持ち、安心安全な気持ちを持つのはどのような労働環境でしょうか？ 」

「そのような状況下で、教師が目的意識（教師エージェンシー）が持てるようになるメカニズムにはどのようなものが考えられますか？ 」

ダイアログBで話し合われた質問

「学びのユニバーサルデザインをチェックリストとして活用します。学習のためのユニバーサルデザインのどの部分に共感しましたか？ 」

「全人的な育成を促進するために「学習と評価」のパラダイムを変えましょう。立場の弱い子どもたちがよりよく学び、ウェルビーイングを満たされるために評価をどのように変えられる、あるいは変えられるべきだと思いますか？ 」

「官民パートナーシップには潜在的な機会と新しいリスクの両方が伴うことを認識しましょう。Ed-techツールやサービスを導入する際の、学校側の経験はどのようなものでしたか？ 」

「個別化されたカリキュラムや教科横断的なコンピテンシー・ベースのカリキュラムが不評とならないように気をつけましょう。あなたの国では、「個別化されたカリキュラム」や「教科横断的なコンピテンシー・ベースのカリキュラム」に対して教師や保護者はどのような「イメージ」や「期待」を有していますか？ 」

「見える格差と見えない格差を無くしていくために必要なリソースを過小評価してはいけません。立場の弱い子どもが直面する課題のうち、「見える」課題と「見えない」課題をそれぞれ挙げてください。このような子どもたちをサポートするためには、どのような（経済的、及びそれ以外の）リソースが必要でしょうか？ 」

ダイアログCで話し合われた質問

「公正性の実現に向けて、教師がカリキュラムや個別化されたカリキュラムを設計、そして実施するために必要なコンピテンシーとはどのようなものでしょうか？ 」

目的地２：学習の公正性確保と労働環境改善のためのコンピテンシー

子どもは公正（公平）な学習環境のために何を必要としていますか?

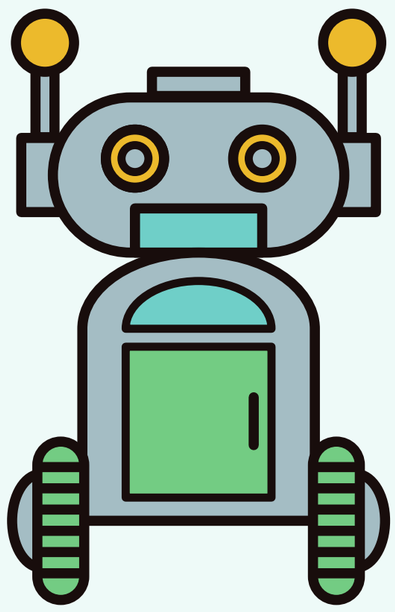
- 創造性を発揮して間違いが許される自由
- 自身の学習に対するオーナーシップとエージェンシーをより一層持てる
- 現実世界の課題に結びつく真正な学びに取り組む

新しいデジタルツールは学習をより楽しいものにしますが、「私たちは単により良い教材や教授が必要な訳ではありません。私たちは周囲との調整を取りながら、成長するためのサポートも必要です。」
- セレスティン・ホアン，サンタ・ロレンシア中学校（インドネシア）の生徒

フォーラム参加者は、どのような学習環境が子どもたちの学習意欲を高めるのか、また、そうした環境を構築するために教師が必要とするコンピテンシーについて話し合いました。バーチャル・ツアーで訪問したエストニアにある3つの学校のビデオ（こちらからご覧いただけます）は、省察と対話を促し、子どもと教師のエージェンシーとウェルビーイングを促進する学習環境の様々な側面を示してくれました。

ウエモサ（Uuemõisa）校の子どもたちは、タッチスクリーンのホワイトボードを使用した授業に参加し、タブレットで小テストを受けます
-ウエモサ小学校，エストニア

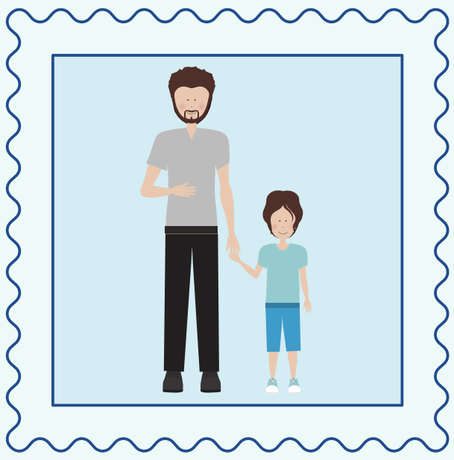
パイクセ（Paikuse）校の子どもたちは、ロボット工学や情報学の授業を通して、プログラミングなどのデジタルスキルを獲得しています
-パイクセ校，エストニア



グスタフ・アドルフィ（Gustav Adolfi）校は、建物の中央に大きなアトリウムがあり、いつでも学生たちが集まれるようになっています。また、バーチャルリアリティルームや、13世紀の修道院を利用したアカデミックギャラリーでも、学生たちは楽しく学んでいます。
- グスタフ・アドルフィ・グラマースクール（高等学校に相当），エストニア

子どものエージェンシーを促進する学習環境があれば、子どもは自分のペースでいつでもどこでも学習できるようになり、子どものニーズや興味に応じた学習に参加できるようになります。その結果、学びは楽しく、彼（女）らの生活に関連したものになります。

保護者は子どもの公正な学習環境が確保されるために何を必要としていますか?



- 子どもの学習に関わりが持てているという実感
- 子どもの教師と学校への信頼
- 子どものニーズが満たされているという安心感

フォーラム1日目の全体セッションでは、親を代表してリーサがパネリストとして登壇し、格差を是正し公正性を実現し、ステークホルダー全員のウェルビーイングを保障するために必要な教師のコンピテンシー、デジタル変革、カリキュラムの改革に関する実践が共有されました。

「学校からはもっと信頼してもらいたいです。子どもには携帯やコンピュータの画面から得られないようなスキルが身につけられるようにし、例えば自己制御、時間の管理、計画性や適応性、それからこれから生きていくために必要なことが学べる森林キャンプなどの古き良きスキルを重視してもらいたいと思います。」
–リーサ・パコスタ，保護者（エストニア）

デジタル技術は、学校と親とのコミュニケーション手段を強固にし、子どもの教育への保護者の参加を促す機会をもたらします。
–「カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する」報告書 (OECD, 2021, 27)

包摂的なカリキュラムでは、子どもの学習をサポートする保護者の役割も重要だという認識が高まっており、それはまた、保護者がカリキュラムの主要な読み手とまではいかないにしても、潜在的な読者であると考えられていることにも表れています。最近行われたOECD Future of Education and Skillsによる調査では、加盟国・州の86%において、保護者がカリキュラムの読者としてみなされていることが明らかになっています。
– 「カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する」(OECD, 2021, 55)

より深く関わりを持つことで保護者は学校がどのように運営されているかより良く理解できるようになり、同時に教師や学校運営者とのコミュニケーションを促進できるようになることで信頼の構築、尊敬する態度の醸成、そして協力できる関係性が育めるようになります。

教師は公正な労働・学習環境のために何を必要としていますか?

- 専門性の開発と教師同士の協働による継続的な学び
  - 担任する生徒のカリキュラムを個別化する
  - 教育・評価方法を多様化する
- 1人ひとりの子どものニーズや興味についてより注意を払う

「私たちは、廊下やアトリウム、屋外をはじめとする様々な場所で学びます。教室はコンピューター・ラボになり、新しい発見をする場を提供します。教師全員が、担当教科の中に情報テクノロジー（IT）を取り入れる責務を持てるようにすることで、すべての学習段階でデジタル・コンピテンシーが育成されるようになります。教師の仕事は子どもに機会を提供することです。」
- イングリッド・マアドヴェール、グスタフ・アドルフ校（エストニア）の教育技術者

マリアはティーチング・コンパス2030の共創について対談したグローバル・フォーラム3日目の全体セッションでパネリストとして登壇しました。パネルディスカッションの後でフォーラム参加者は、格差を是正し公正性を実現するために個別化されたカリキュラムをデザイン及び実施するために必要な教師のコンピテンシーについて話し合いました。

「私のクラスには様々なニーズと期待を有する様々な子どもがいます。中には複数の課題を抱えている子どももいます。この状況を解決するためには、公正性のギャップを埋めるための学習環境を創出することが重要です。私が創出しようとしている学習環境は、子どもたちが身体的にも精神的にも安心安全だと感じられる環境です。それは、子どもたちが自分の考えを安心して共有できる場で、様々な視点や範囲が許容されている場です。」
-マリア・コンセイソン・ピンヘイロ、モイメンタ・ダ・ベイラ学校クラスター（ポルトガル）のフランス語教師

理想的な労働環境のもとで教師は、専門的なスキルや成長型マインドセットを身に付けられるようになり、周りから敬意を持って接してもらえるようになり、カリキュラム・オーバーロードが削減でき、より良いワーク・ライフバランスを保てるようになります。

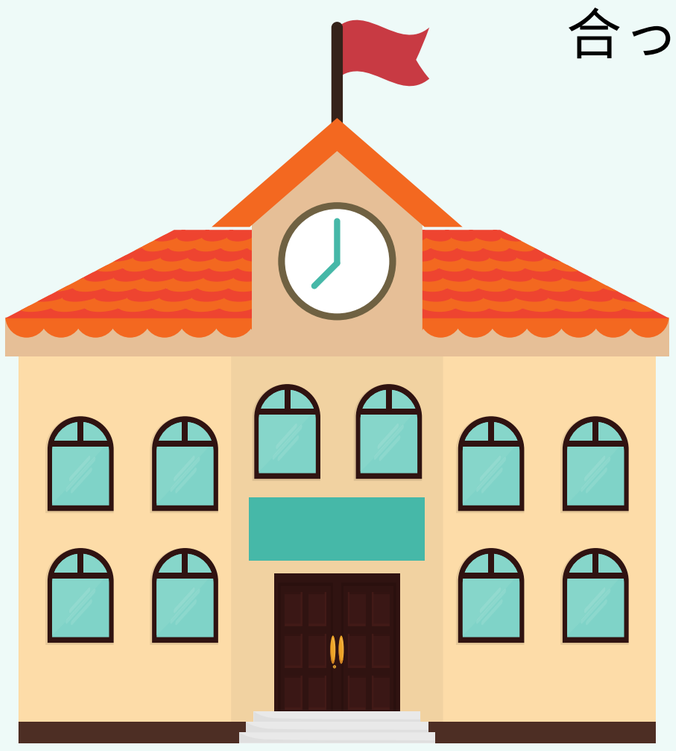
学校管理職はどのようにして自律的な学習及び労働環境を創出できますか?

- 教師や事務職員のエージェンシーを高めることで、学校全体の変化を促す
- 教師が創造性を発揮でき、教師の権利と責任を尊重し、子どもたちが成功するために必要なリソースをすべて教師が確保できるような説明責任体制を導入する

「学校管理職の仕事は、学校の業務と責任を明確にし、地域コミュニティの代表者と協力することです。学校の目的は、学術的なスキルや知識を教えることだけではありません。モチベーション、自己制御、メンタル・ヘルス、そして学習スキルといった内容は、多くの家庭環境で必要になってきているため、教室で解説されるべきです。」
-インドレック・リレマジ、エミリ校（エストニア）の校長

「私たちの学校クラスターの学校管理職は、教師と子どもたちの関係性を改善し、共同エージェンシーを発揮できるようにしました。しかし、学校は地域コミュニティと切り離すことができないため、保護者、大学、地域の人たち、企業、科学館、博物館、研究所を巻き込み、学習者をサポートしてきました。教師エージェンシーを支援する最善の方法には、リーダーシップの共有、エンパワーメント、共感、帰属意識、教師と子どもの多様性の尊重、ウェルビーイングの保障、誰も取り残さないためにポジティブでやりがいのある人間関係を醸成すること、が含まれます。私たちの学校クラスターにおいて、インクルージョンとはマインドセットを指します。」
-アナ・クラウディア・コーエン・ドミンゴス、学校管理職者（ポルトガル）

インドレックは、教師のコンピテンシー、デジタル改革、カリキュラム改訂について話し合われた1日目の全体会議でパネリストとして登壇しました。
アナ・クラウディアは、ティーチング・コンパス 2030の共創について話し合った3日目の全体セッションでパネリストとして登壇しました。



学校管理職者は自律的な学習・労働環境を構築することで恩恵を受けることができます。例えば教師のエンパワメントを促すような教師エージェンシーを教師が持てるようにすることで、学校システム全体に効果的な変化をもたらすことができ、それはまた社会の変容するニーズに学校のカリキュラムが応えられるようにし、子どもの雇用適性を高めることにもなります。

政策立案者はどのように協働的な学習・労働環境を構築できますか?

- 個別化された学習を法案やカリキュラムに取り入れる
- 学校が技術的なサポートを受けられるような局所的な財政支援を提供する
- カリキュラムや教材を複数の言語で出版する
- 個別化された学習計画やシラバスをデザインできるように教師やスクールリーダーを支援する
- 落ちこぼれるリスクにある生徒たちを支援するために（保護者や地域など）学校外のステークホルダーを巻き込み、課外活動を利用する

-「カリキュラムをデザインして格差をなくし公正性を実現する」報告書（*OECD, 2021, 9*）

「教育の未来を考えるステークホルダーは全員共通の目標を持っています：公正な教育システムを構築すること… 社会政策と教育政策の整合性が取れるように構造的なバリアを取り除くこと。ステークホルダー全員が学ぶことと教えることに対して満足するような状況を創出すること。」
-リーナ・ケルスナ、エストニア教育研究省大臣

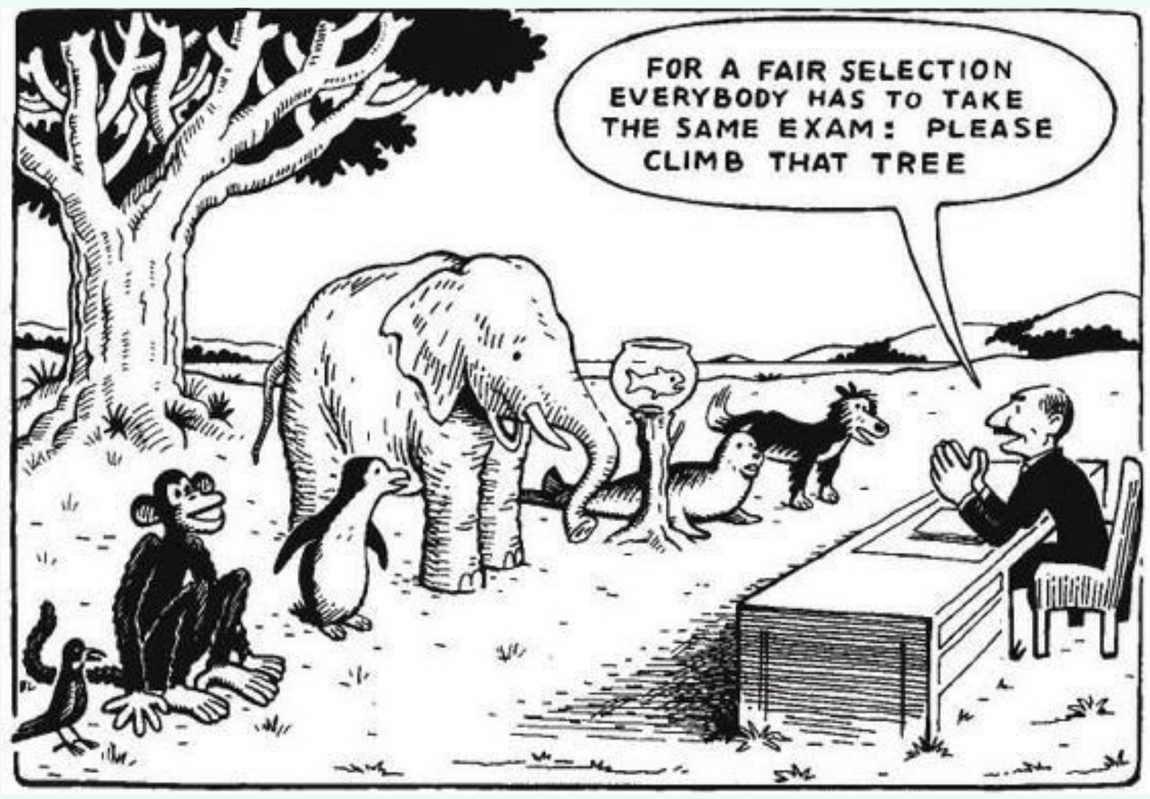
第3回グローバル・フォーラムに出席した政策立案者による振り返り

「誰も取り残されないようにしなければならない、教育が社会移動を促進させる最大の希望だ、と口にするだけでは足りないのです。言葉を行動に起こさなければなりません。包摂性や公正性の獲得はカリキュラム政策の課題です。第3回グローバル・フォーラムは、学習の軌道が異なってもある程度の適応性や柔軟性を持って公正な結果をもたらす、どの生徒も落ちこぼれないカリキュラムをどう策定していくかを話し合う機会になりました。子どもたち全員に対応できる万能なカリキュラムは存在しないので、カリキュラムのデザインに公正性をガイドラインとして用いることは、教育を通して道理（ジャスティス）を適えるための大きなステップです。」
-ジョアオ・コスタ、ポルトガル教育省教育国務長官

「Ed2030ラーニング・コンパスは、教育の最終ゴールを - 個人、家族、地域コミュニティ、国全体、そしてグローバルを含む - ウェルビーイングに掲げています。このゴールには、我々がお互いに敬意を示し、サポートし合う、公正な関係性がどの教室でも芽生えて発展できるかを検討しなければ到達できません。グローバル・フォーラムで教師に焦点を当てたのは非常に重要なことでした。それは公正性に関する国及び国際的な政策及びコミットメントが学校や教師によって実践されるからです。政策が実現されるためには、教師教育や教員研修がカリキュラム改訂と連携するようでなければなりません。」
-スザン・ディロン、OECD 教育とスキルの未来2030 議長

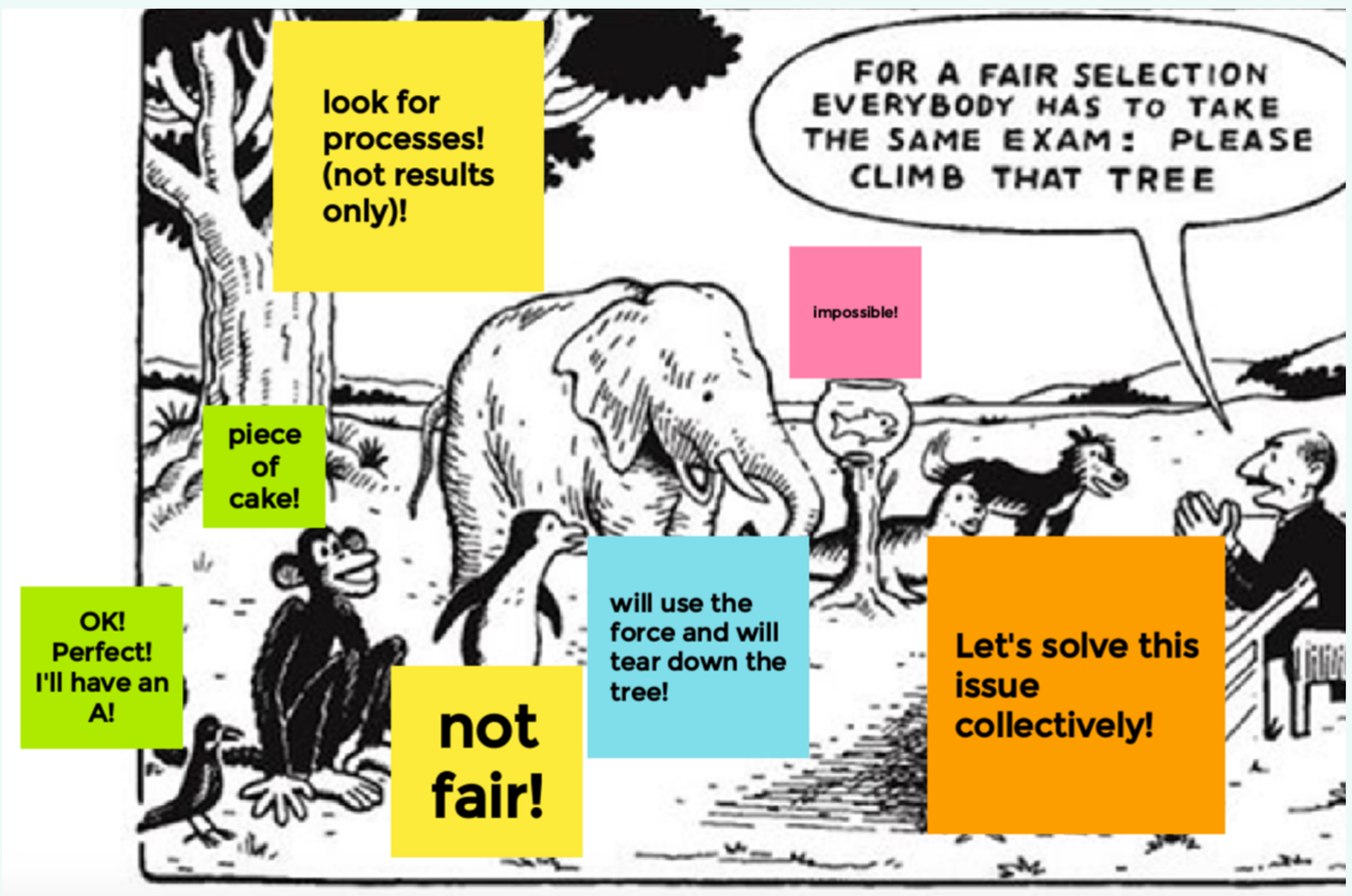
フォーラムの参加者は、学びのユニバーサルデザインや、すべての子どもがカリキュラムにアクセスし、学習成果を発揮できるようにするために必要な配慮や調整について議論しました。

インドネシアのサンタ・ロレンシア中学校に在籍するオーレル・イバンカは、左下の画像をもとに、包摂的な教室を作るためにはチームワークが必要だとコメントしました。



「誰もが長所と短所をもっている社会ではチームワークと、自分の下限と上限の範囲内で働けることが大切です…（動物たちを評価している人間は）それぞれの限度内でどれほど協力し合えるのかに基づいて判断すべきです。」

フォーラム参加者はワークショップで、同じ画像を触媒にして機会の公平性についての見解を話し合いました。ワークショップでは右の画像のように、Google社のデジタル・ホワイトボード、Jamboardを利用し、課題に対するコメントや解決案を付箋に残して共有しました。



フォーラム参加者は、効果的に格差を是正して公正性を実現するために必要な教師のコンピテンシーと、それを教師が身につけられるようにするステークスホルダーの支援を次のように特定しました：

- 子どもたちの格差を是正し公正性を実現するために有益なデジタル・リテラシー
- すべての子どもがカリキュラムにアクセスでき、知っていることや出来ることを披露できるようにするための多様な教育・評価方法
- 社会的・情緒的スキル、協働スキル、創造力と批判的思考力
- 適応性、信頼、コミュニケーション、共感、アクティブ・リスニング、辛抱強さ、楽観主義

きょうそうさんかくたんけんねっとのメンバーも幾名か第3回グローバル・フォーラムに参加しました。以下は、参加した人たちの振り返りです。

「エストニアはこの一月に政権交代があり、女性が首相になり、文科大臣も女性が務めています（彼女は２目の会議でプレゼンしました）。パネリストや司会を生徒の代表が行い、生徒ユニオン（生徒自治会）の果たしている役割の大きさも実感しました。エストニアはデジタル化の先進国という点だけではなく、このようなジェンダー平等、民主主義の深化（現政権だからかも知れませんが）に努めている、という点も注目される必要があると思いました。OECDのエージェンシーという視点もこの民主主義の深化を深く関わっています。日本でもはともすればデジタル化のみに、目がいきがちですが、政治の民主化があってこそのデジタルトランスフォーメーションであるというところが、日本でももっと強調されていい点だと思います。」（小玉重夫）

「それぞれの国や地域で、進めなければならないチャレンジが異なっているところもありましたが、共通しているようなこともありました。公平性の格差を縮める教育を実施していくためには、生徒の声を大切にした教育のイノベーションが必要だが、それは専門性から考えても、労力から考えても教師や生徒だけで実現できるわけではありません。保護者や地域、社会全体の理解が不十分なために、教育改革が思ったように進まないというのは、日本だけではなく世界中でもあるようでした。保護者、地域の方、民間セクターの方に、公正性の格差を縮めるための取組について当事者意識を感じていただき、教師や生徒と共創していく体制を形成していくことが鍵になるという話が盛り上がりました。多様な人が参画でき、対話を行うことができるエコシステムの大切さを改めて考えることができました。」（松尾直博）

「個人的に印象に残った部分は、各自に応じた教育についてです。エストニアや韓国の方が各自に応じた教育は彼らの強みに応じて行う方がよいという話をしていました。その際に私としては強みに応じて各自の教育を作るのは大切だが生徒は自分を完璧に理解できているわけではなく強みがわからない生徒もいるということを教師は知っておく必要があるという話をしました。その後秋田先生も各自にあった教育とはという問いをされており議論が活発になりました。国や（もちろん人によって）言葉の捉え方には固定観念や偏見が含まれるため様々な参加者がいることの意義を大いに感じました。」（緩詰千馬）

きょうそうさんかくたんけんねっとのメンバーも幾名か第3回グローバル・フォーラムに参加しました。以下は、参加した人たちの振り返りです。

「個人的に3日目の議論の中で生徒と教師が置かれる環境、well-beingについての議論が印象的でした。エストニアの生徒が生徒のwell-beingを高めるためには生徒が求めていることを容認できる環境作りをしなければならないと言っていました。そこで、日本の学校で問題のなっている校則の厳しさと生徒の束縛度について共有しました。すると、ドイツで中学教諭をしている方が教師は教育規定に基づき授業を行わなければならないため、生徒のやりたいことを全て優先することは出来ない。という意見を共有してくれました。そこで感じたのが教師も生徒も縛られているという点では置かれた状況が似ているのではないかと感じました。国は違っていてもそれぞれが抱えている問題は共通点があり、その点を掘り下げていくことで多様性を持った意見や価値観を共有しながら答えに近づいていけるのだと感じた。また、国際的にこの会議を行う意義を改めて感じることが出来た。」（竹内陽渚）

「私が特に印象に残っているのは、３日目での対話です。
私たちのグループでは、どのような学習環境によって生徒の学習意欲を高めて目的意識を持ち、安心感を与えることができるのか話し合いました。生徒と先生の間に「信頼関係」があることで、生徒がチャレンジしやすくなるのではないかという話になりました。信頼があれば、間違えを恐れずに自分の考えを話しやすい雰囲気をつくることができます。
気軽に話し合える場をつくることで、より良い解決方法が見つかると思います。
対話に参加されていた先生からも、生徒だけではなく先生がやりたいことにチャレンジできる場になるとのお話もいただきました。
この対話自体も、生徒と先生の間に信頼関係があることによってどんどんアイデアが出されていたので、生徒も先生もみんなが学習意欲につながる学習環境が実現できると確信しました。」（七島海希）

次の目的地：E2030のテーマ別ワーキンググループについての簡単な説明

TWG1: 2030年のための教師エージェンシー、教師ウェルビーイング、教師コンピテンシー

目的: TWG1は、ラーニング・コンパス2030に根ざすEducation 2030の中核概念「教師エージェンシー」「ウェルビーイング」「コンピテンシー」について探究します。TWG1は次のような内容に関する質問を探究し、ベスト・プラクティスを共有します：教師の将来像と役割、学校で教師のウェルビーイングを保障するための学校管理職の役割、未来のニーズに応えるために教師が必要とする知識、スキル、態度、価値観。
目標: 多様な子どもたちを包摂し、予期せぬ将来に向けて準備ができているようにするための教師と学校管理職の役割は軽視できません。格差を是正し公正性を実現していくには、教師の自律性だけでなく、エージェンシーやラーニング・コンパス2030で示された変革を起こすコンピテンシーや価値観をどのように行使するかによります。教師のウェルビーイングを保障し、また教師が成功するために必要なコンピテンシーを身に付けられるようにすることが重要です。

TWG2: カリキュラム改革と教員養成・教員研修の連携

目的: TWG2は、各国の教員免許や認定書の基準づくり、教員養成や教員研修に焦点を当てています。TWG2では、ベスト・プラクティスを共有しつつ、次のような質問について検討します：現在使用されている教師の基準やコンピテンシーにはどのようなものがあるか？未来志向のコンピテンシーフレームワークと連携されている教員免許・資格にはどのような事例があるか？教員養成や教員研修のプログラムにおいて、カリキュラム改革と連携している・していない、現行あるいは新規の要素は何か？
目標: 教員になるための教育を受け、専門性を磨く研修を受けている教師は、格差を是正し公正性を実現することや包摂性に関して研究成果に基づいた判断を下すことができ、生徒に対して生徒エージェンシーの発揮や生徒ウェルビーイングの向上を促すことができます。教員養成における課程認定基準の詳細は、カリキュラムの改訂に合わせて更新される必要があります。

TWG3: カリキュラム改革と指導方法・学習評価との連携

目的: TWG3はカリキュラムの実施に焦点を当てています。特に、教師の育成、ペダゴジー、評価を十分考慮したうえでカリキュラムと指導要領におけるその他側面との連携や意図された・実施された・達成されたカリキュラム間の連携に焦点を当てています。
目標: TWG3の主な作業は次の２つです：i) E2030参加国における最近・現行のカリキュラム改革と明示的に連携するペダゴジーと評価の種類を把握すること；そしてii)（文献調査、事例、ストーリー、ケーススタディを通して）カリキュラム間の連携に対する影響・効果のレビュー。

次の目的地：E2030のテーマ別ワーキンググループについての簡単な説明

TWG4: 実験的な学校のハブ

目的: TWG4の主な目的は、実験的な取り組みを行っている最先端の学校をグローバルな教育政策の対話に巻き込み、各国が世界中で起きている学校レベルのイノベーションを学べるようにすることです。TWG4に参加する学校は次のうち、いずれかの技術的または非技術的な改革あるいは実験に取り組んでいます：a)カリキュラムのデザインと実施、b)学習の戦略と実践、c)指導の戦略と実践、d)子どもたちの評価。

目標 TWG4では、様々なイノベーションを実践している学校の実体験を掘り起こし、その実践を追うことで、そこで行われている実験の成功と失敗の要因について議論や振り返りを行えるようにします。TWG4の活動は、ポルトガル実験的な学校群（Portugal Experimental Schools）と共同で行われています。参加校は、教育の新たなビジョンを共創する政策立案者、教育機関、教師、生徒学生、社会的パートナーによって構成される国際的なネットワークの一員となります。

TWG5: E2030の活動を広く社会に伝えるための参画・コミュニケーション・普及

目的: TWG5は、Education 2030への参画・からのコミュニケーション戦略を世界中のより多くの人々に広めるために発足しました。

目標: 世界中のステークホルダーによる参画を強化するために次の活動を行っています：i)OECDラーニング・コンパス2030の資料を各国の言語へ翻訳し、普及する；ii)ワークショップやウェビナーを通じてラーニング・コンパスの主要概念の理解を深める（ラーニング・コンパス・シリーズのワークショップの録画は、E2030のウェブサイトにてご覧頂けます；そして、iii)E2030プロジェクトの内容に関連した時代の先端をいく思想を生み出すリーダーによる貢献の推薦や収集。

Student Voice Campaign

E2030は、「カリキュラムのリ（再）デザインに関する生徒の声」と題したStudent Voice Campaignを実施しています。世界中の高校生および中学生を対象に、カリキュラム（リ）デザインに関する6つの問いいずれかに答える動画を投稿していただきます。詳細な参加方法は、ビデオを提出する際に使用するMicrosoft Formに記載されています（bit.ly/2030StudentVoice）。 提出期限は2022年1月31日まで延長されましたので奮ってご参加ください。

PARIS ESTONIA

クリエイティブ・サマリー・レコード（本紙）は次のメンバーによって作成されました：

Project Leader Pille Liblik (FG1), Project Leader Phil Lambert (FG2), Project Leader Wesley Chew (FG3), Yuka Hasegawa, Lucía Burtnik, Vikram Ghandeeswaran Narayanan, Ishleen Kaur, Annie Bergh, Imbi Henno, Kart-Katrin Pere, Annike Soodla, Cassie Morley (OECD) and Kevin Gillespie (OECD)
和訳はKSTN事務局窓口の豊田英嗣と長谷川友香が担当しました。

E2030に関する情報は...
下のQRコードをスキャン、あるいは次のURLよりアクセス：
https://www.oecd.org/education/2030-project/

質問やコメントは...
次のメールアドレスにお送りください：
education2030@oecd.org